

東密と台密の相互影響から見た受容と研鑽の展開

↳ 事相・教相両側面からの討究

序論

第一章 東密の形成と空海の凶像制作を中心に（平安時代初期）

第一節 空海の曼荼羅思想

一項 密教における凶像の位置づけ

二項 空海の四種曼荼羅思想

一 四種曼荼羅思想の内容

二 四種曼荼羅思想による經典解釈

a 『大日経開題』 b、『金剛頂経開題』 c、『法華経開題』

三 『十住心論』『秘蔵宝鑰』の帰敬序に表れた四種曼荼羅思想

第二節 空海請来による請来美術と密教凶像の製作

1 10 11 11 18 18 31 44 51

一項 空海が請来した美術

二項 空海が製作に関わった凶像

a、千手観音曼荼羅 b、請来凶像の転写と新たな凶像の製作

c、金剛薩埵十七尊曼荼羅

d、四大明王の彫像と四摂・八供養・八方天の絵像

e、金剛峯寺金堂の諸尊 f、東寺講堂の立体曼荼羅

第三節 複数の経典によって構成された東寺講堂立体曼荼羅の製作

一項 東寺講堂立体曼荼羅についての解釈をめぐる議論

二項 空海における三輪身についての再検討

三項 空海思想に見える尊格の位置づけ

## 第二章 台密の形成と東密からの影響（平安時代前期）

### 第一節 台密の形成

63 52

85

88

99

107

145

145

第二節 初期の天台密教と空海密教との関係性

- 一 最澄と空海
- 二 空海に対する円仁と円珍の態度
- 三 安然による空海の捉え方

第三節 東・台両密の橋渡しとなった人物達

- 一 東密宗叡・玄静と台密安然
- 二 東密淳祐・元杲と台密良源の交流及び小野流祖仁海
- 三 台密皇慶と高野山金剛三昧院本『四十帖決』

第三章 台密の独自の展開（平安時代前・中期）

第一節 台密で独自に発展した事相

- 一項 阿字観本尊に関する台密の言及
  - 一 台密における阿字観の評価
  - 二 台密の文献に残された阿字観本尊に関する記述

241 238 235 235

234

218 211 203 203

194 186 180 180

	二項	台密の宝冠阿弥陀如来と阿弥陀法	259
	一	常行三昧堂の本尊	259
	二	台密の阿弥陀法における曼荼羅上の大日・阿弥陀の本尊位の交替	265
	三項	台密における仁王経系曼荼羅様と文殊菩薩の鈎印	272
	一	台密における仁王経曼荼羅様	279
	二	台密における文殊菩薩の鈎印	285
第二節		台密独自の思想的展開	292
	一項	台密文献に見られる両部即一の思想	294
	一	両部而二不二に関する議論	294
	二	安然の円密一致論における法華経と密教の関係と その他台密文献に見られる金胎両部の思想	298
	二項	台密安然の『瑜祇経』解釈	304
	一	空海の著述における『瑜祇経』の取り扱い	305
	二	安然による『瑜祇経』の解釈	308

第四章 東密による台密の受容と展開（平安時代後期～鎌倉時代）

第一節 東密で用いられた図像に見られる台密の影響

一項 東密の阿字観本尊成立に見られる台密の影響

一 東密の阿字観と阿字観本尊に関わる文献

二 東密文献に見られる九重阿字観

二項 東密の紅頗梨色阿弥陀如来像の成立と台密の阿弥陀法の関わり

一 紅頗梨色阿弥陀如来像の思想的背景と成立時期

二 常行三昧堂本尊と紅頗梨色阿弥陀如来の図像的比較

三 曼荼羅上における大日・阿弥陀の本尊位の交替

三項 東密の仁王経曼荼羅製作の意図とその分類

（仁海本仁王経曼荼羅の成立に見られる台密の影響を中心に）

一 仁海本曼荼羅考案の背景

a、五大明王を中心とする仁王経曼荼羅 b、仁海本における

東上配置の背景 c、仁海が金剛利菩薩を鉤形に表した背景

382

378

371

365

356

354

348

327

326

325

325

- 二 定海本曼荼羅考案の背景
- 三 後世の人師による仁海本への言及

第二節 東密で成立した両部而二不二思想における台密の影響

- 一 項 東密済暹の両部即一思想と台密の言説
  - 一 空海・覚鑿の両部思想概観
  - 二 円珍の両部即一と済暹の引用
- 二 項 東密の『瑜祇経』解釈の変遷における台密安然の影響

第五章 台密による東密の再受容

↳ 東密で成立した両頭愛染の動向を中心に↳ (鎌倉↳南北朝時代)

- 第一節 東密・台密における『瑜祇経』所説の尊格理解
  - 一 東密における愛染明王の理解
  - 二 東密と台密の仏眼仏母に関する尊格理解の差異

第二節 鎌倉時代以降の東密における愛染明王の一展開

↳ 両頭愛染曼荼羅図を中心に

一項 宗教思想史研究における両頭愛染についての評価

二項 慈悲形と忿怒形の両頭愛染

三項 愛染・不動二明王の組み合わせと金胎両部

第三節 両頭愛染に関する次第類の分析

一項 金沢文庫蔵書に見られる両頭愛染に関する次第類

a、『一身両頭六臂愛染王』 b、『両頭八臂愛染法王記』

c、『両頭八臂愛染王記』 d、『渴秘』 「造人形杵事」 e、『隆鏡抄』

二項 高野山持明院蔵両頭愛染曼荼羅図と両頭愛染法

第四節 台密による東密の愛染法に対する批判と受容

結論

凡例

・本論では、平安時代について、初期・前期・中期・後期に大別して論じている。その概念は、現在通例となっている歴史区分に従っており、律令制再興期の九世紀～十世紀初頭を前期、摂関期の十世紀～十一世紀中期を中期、院政期が始まる十一世紀中期～それ以降を後期とした。なお、最澄と空海の時代に限って、初期という分類を使用した。本論に登場する主な人物を時代別に配せば

最澄・空海↓平安初期

円仁・円珍・安然・宗叡↓平安前期

皇慶・覚超・元杲・仁海↓平安時代中期

実運・実範・覚鑿・覚禅↓平安時代後期

頼瑜・道範・慈円↓鎌倉時代

となる。

・人物の生没年代については、必要に応じてなるべく付したが、生没年が不明の場合には付していない。また、基本的には一度生没年を記した人物については、それ以降は付していないが、特に時代を確認するために改めて付すべきと考えた場合には複数回、付した場合もある。



・各章の必要箇所を図を伏したが、図の番号については、改章のごとに「図1」から  
はじめ。

- ・『大正新修大藏経』↓『大正藏』
- ・『大正新修大藏経』図像部↓『大正図像』
- ・『定本弘法大師全集』↓『定弘全』
- ・『弘法大師全集』↓『弘全』
- ・『興教大師全集』↓『興全』
- ・『真言宗全宗』↓『真全』
- ・『続真言宗全書』↓『続真全』
- ・『日本大藏経』↓『日藏経』
- ・『大日本仏教全書』↓『日仏全』（二段組本を使用）
- ・『天台宗全書』↓『天全』
- ・『続天台宗全書』↓『続天全』